

島田孝一先生米寿記念号によせて

島田孝一先生が悠々米寿に達せられ、なお矍鑠として社会的な活動をつづけられている。流通経済大学のスタッフが、これを慶祝して、この論集を「島田孝一先生米寿記念号」と銘打った。まことにささやかなものではあるが、これを先生に捧げて、一層の御長寿を祈念する次第である。

先生は、明治26年9月21日、雄弁をもって知られた改進黨の領袖、沼南島田三郎翁の御長男として、東京麴町の番町、即ち今の千代田区四番町2番地、つまり現在の御住所でお生まれになっている。お祖父様は幕府の御家人であったというから、先生はまさしくほんものの江戸っ子である。先生の気取りのないお人柄や、屈託のないからりとした御性格は、きっと江戸っ子気質なのであろう。また一方、先生は資性温厚で、感情を露にされるようなことのない方であるが、時折、反権力的なキリッとした姿勢をのぞかせられることがある。御尊父、沼南翁のもとには在野の政客の往来が頻繁で、明治の義人、田中正造翁などもしばしば出入し、時には長逗留のこともあったというから、先生の在野精神は、そんな環境の中でごく自然に育まれたものであろう。大正元年、早稲田に入学されたのも、専ら官僚養成機関であった当時の帝国大学に、嫌悪を抱いておられた御尊父の強い慫慂があったからだそうである。大正6年7月、先生は大学部商科を御卒業になっているが、どうやらこの間に、交通経済学が先生のライフワークとして決定づけられたようである。当時のわが国では、交通運輸関係を研究対象とする経済学は未成熟で、まだ体系化されていなかった。御卒業後の先生は、同大学の研究科に入学され、伊藤重四郎教授のもとで研究生活に入られたが、大正7年4月、Pennsylvania 大学に留学され、主に E. R. Johnson 教授の指導を受けておられる。一般に、今世紀初めの日本の交通経済学は、アメリカの W. Z. Ripley や F. W. Taussig、そして、この E. R. Johnson の影響を強く受けたといわれているほどであるから、その直弟子であられる先生が、後年、わが国交通学界に果たされた役割や貢献度については、今さら論及するまでもなからう。

大正11年3月、英、独、仏の各国を回って帰朝された先生は、その後、昭和39年3月、停年で御退職になるまで一貫して早稲田大学の教壇に立たれ、この間、昭和21年6月から、同29年9月までの8年余、同大学総長の重責を担われている。当時の先生は50歳台で、まだお若くもあったが、この頃が、多彩な先生の御経歴の中でも最も多端な時期ではなかったかと思う。敗戦日本が新しい価値観の構築を迫られる中で、全私学の代表として、学制改革など国の文教政策の展開に、先生の出番は決して少なくなかったはずである。また、先生の御履歴では、この頃から、政府その他の機関の交通

運輸に関する審議会委員などの役職が目立って多くなっている。経済復興の根幹である交通の整備に、先生の学識がいかに重きをなしていたかがうかがわれるところである。

先生と流通経済大学との関わりは、昭和40年の創立時からであり、初代の学長として、まる9年間お務めになっている。わが国では最大級のマンモス大学から、新設の小規模大学の学長になられたのであるから、初めは勝手が違い、いささかとまどわれたようであったが、やがて持前の篤実なお人柄で大学の基盤づくりを推進された。とりわけ、新設の私学にとって何よりの難題である、学の独立と教授会の自治が、その任期中に確立をみたのは、何といても先生の御功績である。リベラリストであられる初代学長の大きな存在がなければ、自由と自治の学風が、おそらく、ああはすんなり育たなかったであろう。

昭和49年3月、高齢の故をもって先生は御勇退になったが、その扶植された学風は今に至って愈光彩を放ち、流通経済大学の充実度は年毎に高まってきている。

先生の御退任に際し、流通経済大学はその御功績に応えて名誉学長の称号を贈り、今も学園の理事として御指導を仰いでいるのであるが、おみうけするところ先生は、この晩年のお仕事に深い愛情を抱いておられるようである。思うに、米寿に達せられ、悟りすまされた先生の胸裡には、およそ三つの関心事があるのではなかろうか。即ち、一つは、交通経済学に対するつきざる学問的な関心であり、その二は、多年の職場でもあった母校、早稲田大学であり、その三は、教育者として、学者として、最後の情熱を注がれた流通経済大学のことではなかろうか。先生の衣鉢をつぐ立場の私としては、この大学の研究と教育を一層さかんにして、ひたすらそのお心にお応えしなければならない。

ともあれ、先生には、いつまでも御壮健で流通経済大学の行く末をみとどけていただかなければならない。

昭和57年 初春

流通経済大学学長

佐 伯 弘 治